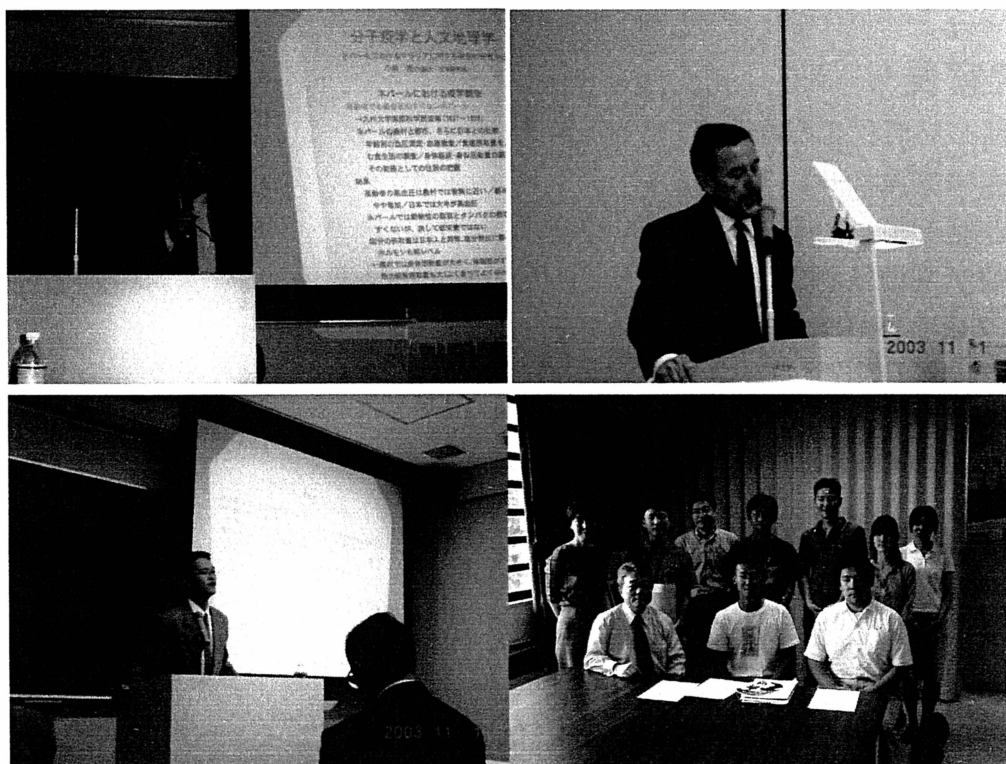


京都大学 地理学談話会

会 報

第 15 号



2004

[目 次]

寄稿

友人について.....	藤田 昭（平成3年卒）	1
地理学の暖簾を再びくぐって.....	米家 泰作（平成5年卒）	2

講演会の報告〔D.ラムリー先生・小林茂先生・山神達也氏〕	4
------------------------------------	---

研究室便り

＜新しい時代をむかえて＞.....	石川 義孝	10
＜国際交流について＞.....		12
＜談話会員による出版物(2003年発行のもの)＞.....		12
＜研究室の動静＞.....		13
＜3回生と新院生の自己紹介＞		
＜昨年度の実習旅行＞		
＜学部卒業生・院生の進路＞		
＜院生の研究状況の報告＞		
＜学位の取得＞		
＜2004年度講義題目＞		

事務局から

＜地理学談話会2003年度会計報告＞.....	17
＜訃報＞.....	18
＜お知らせ＞.....	18
＜オープンキャンパス：2003年度の報告と2004年度のお知らせ＞.....	19
＜2004年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞.....	20

寄稿

友人について

(株)日立総合計画研究所

藤田 昭 (平成 3 年卒)

偶然であるが最近、昔の友人たちに出会う機会がとみに多くなった。

つい先日も、私の最初の就職先で同期だった友人たちと会う機会があった。今、私は 3 つ目の職場で働いているのだが、転職してよくないことの一つは社内に同期と呼べる人たちがいなくなることだと思っている。社会人も 10 年ともなると同期と言えども出世のライバル、という意識がお互いに強くなって、以前ほど気軽につきあえない、などという人もいるが、私は、若い頃知り合った友人たちというのはやはり気が置けないし、何かの時には頼りにできる存在であると思う。

さて、私が社会に出た時期は既にバブル景気ははじけていたが、特定業種を除く企業にはまだ採用の余裕があった時期でもあり、私の最初の就職先である外資系コンサルティングファーム A 社でも 100 名以上を採用した。だが私を含めて退社する人も多く、10 年以上たった現在、同期の A 社員は 4 分の 1 程度だろうか。

ただ、A 社の良いところは、会社を退

職することを「卒業」と呼び、「卒業生」同士、また「卒業生」と「在籍生」の交流が非常に盛んなところである。そして「卒業」する人は非常に多い(15 年で 95% が「卒業」すると言われる)が、ほとんどの人たちはより自分に合う世界を求めたり、キャリアアップを目指したりと自分の判断でポジティブな転職をしている。

先日会った同期たちも、現在の職は製薬会社、流通系企業、コンピュータメーカーなどバラエティに富んでいた。その時は会えなかった友人たちは、ベンチャー企業のオーナー社長や経営コンサルタントとして独立した者、霞ヶ関のお役人、外交官夫人や某有名お茶メーカー社長夫人、大学やロースクールで医者や弁護士を目指して勉強中という者まで、非常に多岐に渡る職業に就いているが、それぞれ充実した生活を送っているようである。

日常生活の大部分を占める職業生活を異にする、ということは人生において異質な経験を重ねているということだと思う。当然、時が経つにつれ、物の見方や価値観が若干ずれてくる、ということにつながらと思う。

社会人としての生活は、学生時代に比べどうしても単調になってしまうことが多い。そんな生活の中、異質な世界に所属する人たちと一堂に会して会話することは、私にとって良い刺激を受けることのできる貴重な時間となっている。思わぬ業界の裏話が聞けるだけでなく、お互

いの価値観や物の見方のずれが新しいアイデアに結びつくこともある。現に2度目の転職の時などには友人たちから随分沢山の示唆をもらい良い結果につながった。

もちろん現在の会社も、そして2番目の就職先にも、楽しいだけでなく優秀な人が多くいるし、時々仕事を離れて交流していても非常に楽しい。

結局のところ、こうした人たちとの付き合いに支えられて私の社会人人生も大きな波乱を迎えることなく分相応に順調に過ぎているということだろう。そして、“ミドル世代”となる今後は、個人の人生の上でも職業能力としても、適応力や集中力、根気・体力、知識やノウハウの取得といった個人的な能力より、「いざという時頼れる人脈」が比重を増す。決して一時のつきあい、とならずに長くつきあえる関係を築ける人たちを、今後も大切にしていきたいと思う。

といったところで最後に、これから社会に出る前の学生の皆さんに社会人人生の good tips を一つ。学生時代の友人も含めて、若い時代の友人は大切に。細くでもいいから長くつきあいましょう。彼ら彼女らの存在は、きっとあなたの精神をしばし日常から開放し、柔らかくほぐしてくれることでしょう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

地理学の暖簾を再びくぐって

京都大学大学院文学研究科

米家 泰作(平成5年卒)

昨年10月、愛知県立大学文学部から京都大学文学部に転任し、母校の教育に微力ながら携わることになりました。前任校では学際的な学科に所属し、地理学から離れた卒論を担当する機会も多かったのですが(例えばルイ・ヴィトンや美容整形、宝塚歌劇団をテーマにしたもの)、一転して「地理学」という暖簾(のれん)の下に回帰することになりました。老舗の本店(おおだな)の小僧になったように、気持ちを新たにしております。

地理学という看板に対してイメージするものは、本談話会の会員諸氏におかれても、学生院生諸君にとっても、千差万別でしょう。ある方にとってはフィールドワークであり、別の方にとってはGISの画像であり、旅であり、ダウンタウンであり、原油産出の統計であり、地形図のなかの等高線であり、環境問題であり、という多様な答えがあることでしょう。これらはいずれも地理学が社会と切り結ぶ数多くの局面の一つであるわけですが、その局面の深層にある地理学の核心ないし本質を言葉で伝えることには、実は不思議な難しさが潜んでいるのではないかと、私はよく感じます。

私がこのような迂遠な問いにとらわれた契機は、3回生の夏休みに、応地利明教授より「地理学とは何であるか、定義せよ」という題でレポートを課されたことでした。レポート作成のために地理学概論や学史を読めばよむほど、恐ろしいほど長い歴史と幅広い展開をもつこの分野の核心を簡潔に纏めることの困難に、ただ圧倒されたことを思い出します。応地教授はある種の皮肉をこめて、"Geography is what geographers do"（地理学とは地理学者のしていること）という定義を好んで口にされておられました。それが最も偽りのない定義だと思わざるをえなかったものでした。

当時この課題に満足に解答することができなかった私にとって、人は何故、地理に関心を抱くのか、また地理学が必要とされる理由は何かという問いは、禅の公案のような宿題となりました。この宿題は、大学院に進学した時も、職を得て、給与という対価をいただくようになってからも、ずっと考え続けている宿題です。その暫定的な解答の内容も、その時々に応じて変化を遂げているのですが、解答に自信が無くとも地理学に対する魅力が減じるわけではなく、むしろこの公案のもつ奥深さに魅惑されるばかりです。

そのような関心から私は、機会あれば様々な方々に地理学の道を選んだ理由を伺うことを意識するようになりました。ただ、人によって多少は異なるものの、

地理学を選好した理由は往時の文脈と関連づけられて語られることが多く（旅が好きだった、先生に好感をもった、第一志望には強力なライバルがいた、本当は民族学がしたかった、など）、表面的な理由はそうとしても、根本的な理由は実は本人にとっても意識化できないものかもしれないと思うようになりました。考えてみれば当たり前のことで、ある分野の核心的な本質を分かってしまえば、人は最早それに取り組む意欲を失うでしょう。無意識的な部分で惹かれながらも、何に惹かれているか分からないが故に、究めたいと思うのではないのでしょうか。逆の言い方をすれば、地理（地理学）は、ある種の人々にとっては人生と社会を規定するような根本的で魅惑的な存在でありながらも、同時に核心部には近づきがたく、大げさにいえば人知を超えた存在である、ということになるのかもしれませんが。

振り返ってみると私自身、この宿題が頭のなかで像を結ぶようになったのは、博士課程も中頃になってからのことです。その当時の答えは、環境ないし空間というマテリアル（物的）なものが社会と人を最も根底で規定しているにも関わらず、人はその全容を到底把握できないが故に、地理（地理学）的な知を追い求める、といった平凡な解答でした。これはやや本質主義的な面に傾いた地理学観というべきものでしょうが、その程度のことであ

っても、言葉の上っ面だけでなく、実感をもってひしと分かるまで、迂遠な私はかなりの時間を要したようです。ちなみに、R・サックに、人間存在の根底としての地理を論じた『ホモ・ゲオグラフィクス』(地理人)という著書がありますが、さらにずっと先を考えている方がおられることには、勇気づけられるものがあります。

今回、「地理学」に真正面から向き合う職場を得て、恥ずかしげもなく回想めいたことを記しました。しかし地理(地理学)について考えることは、究極の所では自分自身にまで跳ね返ってくる問題を考えることであり、そのような自問自答があってこそ本物の結果がついてくるように思います。学生院生の諸君とは、せっかく学問に触れる以上は、人生観が変わるほど地理学を議論し、地理を選んだ理由を掘り出す手助けができれば、これに過ぐるものはありません。また私自身も、上記の「公案」を腹中に暖めながら、暖簾の下でたゆまず励んでいきたい考えております。未熟者ですが、諸先輩方のご指導・ご鞭撻を賜うことができれば、幸甚です。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～講演会の報告～

2003 年 11 月 1 日、文学部において、談話会秋季講演会として、西オーストラリア大学準教授 D. ラムリー先生(当時、京都大学文学部客員教授)、大阪大学大学院文学研究科教授小林茂先生、京都大学大学院文学研究科博士課程山神達也氏に講演していただきました。

ニューカレドニアにおける フランスの地政学的プロジェクト D. ラムリー (西オーストラリア大学)

フランスは、冷戦期が終わって以来、南太平洋地域での役割を再構築する過程にあると論じられている。ニューカレドニアは地政学的にも経済的にも重要な地域であるが、そこでのフランスの利益と独立運動の利益とは相容れないものである。したがって、両者の対立は、国連が要請しているように原住民の要求が適切に調停されるまで続いていくように思われる。本講演では、ニューカレドニアというフランスの「海外領土」における複雑な対立や政治的な変化が、従来しばしば議論されてきたような民族の回復運動の一例には当たらないものであることを申し上げたい。こうした対立は、むしろ、

長年に渡る抑圧に対する根の深い反応や適応の現れと捉えうるものである。ニューカレドニアに対する抑圧をもたらしたのは、ニューカレドニアが遠く離れており、かつ、豊富な資源を有することを認識した上で、フランスが行ってきた植民地主義と搾取によるさまざまな影響であった。要するに、ニューカレドニアの事例には、本質的に地政学的な要素があり、その対立の全体像や帰結を理解する上では何が重要なのか、十分に考察することが必要なのである。

遠隔性と合意できない不快な行為との関係、あるいは、容認しがたい人間行動の再配置という事柄は、太平洋地域だけでなく他地域にも共通する植民地経営の一つの特徴である。皮肉なことに、太平洋地域は、いくつもの大国によって核兵器の実験や使用が行われてきた、地表上で唯一の地域であるし、今日なお、世界中の核廃棄物処分場の潜在的な候補地である。さらに、太平洋地域はこれまでずっと、諸大国から、流刑あるいは労働のために余剰人口を送り込む先と見なされてきた。こうした行為はいずれも、同地域がヨーロッパから隔絶しているがために行われたことである。たとえば、イギリスは増えすぎた囚人をオーストラリアに送り込み、先住民の土地を接収したが、同様のことを太平洋地域で行ったのがフランスであった。したがって、フランスの場合、ニューカレドニアの先住民の土

地は、フランスにとって「望ましくないもの」を輸送するのに用いられたのであった。

ニューカレドニアの事例には、現在もさまざまな相矛盾する兆候が見られるが、植民地国家の地域的な空間認識がどの程度変りうるものかを大変よく示している。フランスは、ニューカレドニアの先住民たちを本質的に価値のない、文明化されない人間と見なしたけれども、その領土の自然ならびに相対的な位置、また、現有資源や潜在資源については、ニューカレドニアには、その小さな面積をはるかに上回るような大きな重要性があると評価したのであった。したがって、ニューカレドニアのような植民地を獲得し維持してきたことは、フランスの地政学的な野望の現れであり、フランス的な地政学の一つの際だった伝統を反映していると解釈できる。フランスがニューカレドニアを所有していることは、フランスが単にヨーロッパ内部に限られないグローバルな地位を獲得する上で、大いに貢献してきた。また、将来的には、ニューカレドニアの所有は、潜在的に資源豊富な海底や激動するアジア太平洋地域への足がかりを提供するものとなろう。

○◎◎○◎○◎

分子疫学と人文地理学：

ネパールにおける

マラリアに対する適応の研究から

小林 茂（大阪大学大学院文学研究科）

（昭和46年卒）

疾病の研究は、M. Le LannouやJ.M. Hunter, P. Haggettの仕事に見られるように、人文地理学の重要な一角を構成している。演者はこれまで、近世琉球列島の天然痘流行とそれに対する戦略にくわえ、ネパールにおけるマラリアへの適応を研究してきた。ここでは後者について調査研究の概要と成果を報告した。

1. ネパールにおける疫学調査 この調査は、1987年以降九州大学を中心としておこなわれてきた健康科学調査に参加したところからはじまる。その中間山地農村で血圧測定や血液検査、食塩摂取量をふくむ食生活の調査、身体組成・身体活動量の調査をおこない、高齢になっても高血圧のすくない背景をさぐるもので、演者はその前提となる住民の把握（性別・年齢・民族集団・家族構成など）を担当した。

この結果、住民は低栄養ではないこと、塩分の摂取量は日本人と同等で、塩分排出に関与するホルモンも同レベルであることが判明し、塩分摂取量が多いと高血圧になるとか、加齢とともに血圧は上昇するという先進国の常識をくつがえすデータがえられた。けわしい坂道を上り下

りして農作業をおこなう住民の身体活動量は大きく、体脂肪がすくなくて、高血圧にならないわけである。

これに対して、遺伝的特性が関与しているのではないかという指摘があり、1996年にはアンジオテンシン変換酵素遺伝子の多形性に関する分子疫学調査をおこなった。その結果、対象住民と日本人とは大差がないことが判明した。

1996年の調査に際しては、あわせてマラリアに関連する遺伝的多形性の調査もおこなった。従来の調査対象（高度約1250メートル）よりもかなり低所のマラリア危険地帯（高度900メートル）に居住してきた住民の協力を得て検査をおこなったところ、ヘモグロビンE症（後述）が検出された。1998年にさらに関連した住民を検査したところ高頻度の α^+ サラセミア（後述）が検出され、以後本格的調査をおこなっている。

2. マラリアの分子疫学 マラリアはアノフェレス属の蚊によって媒介される原虫による疾患で、症状は間欠的発熱を特色とする。その分子疫学は、大きくわけて3つの方面に展開している。第一はマラリア原虫に関連し、そのDNAを検出して感染を診断するとか、原虫の系統を特定することが可能になっている。第二は媒介蚊の分子遺伝学で、その行動や薬剤耐性に関連した検討がおこなわれている。第三はマラリアに対する抵抗性をともなうと考えられている、ヒトの遺伝的多形

性の検出に関連するもので、赤血球に関連するものだけでも、鎌形赤血球のような異常ヘモグロビン症、ヘモグロビンの産生が低下するサラセミア、酵素の異常によるG6PD欠損症、さらに膜の異常による東南アジア型楕円赤血球症と多彩である。

ネパールでの調査は、隣接しながらも、高所に居住してマラリア感染をさけてきた民族集団(タマン・パルパテ・ネワール)と、低所のマラリア感染危険地帯に居住してきた民族集団(ダヌワール)における遺伝的多形性の検討からはじまった。この結果、ダヌワールでは高率(遺伝子頻度54.1%)の α^+ サラセミアにくわえ、ごく低率のヘモグロビンE症(異常ヘモグロビン症のひとつ)およびG6PD欠損症がみとめられた。他方パルパテ、ネワールについては、 α^+ サラセミアは低率で(遺伝子頻度はそれぞれ12.0%, 13.8%), ごく低率のG6PD欠損症をともなっていた。さらにタマンでは、低率の α^+ サラセミア(同4.8%)がみとめられたただけであった。ダヌワールで高率の α^+ サラセミアがみとめられたのは、彼らが長期間マラリア感染にさらされてきたからと解釈された。

ところで、1950-1960年代のマラリア根絶計画の実施以後、パルパテとネワールは高所からダヌワールの居住地にちかい低所に移住した。しかしそこではマラリアが再度流行するようになっており、これに注目して住民の遺伝的特性とマラリ

ア感染との関係を検討した。この結果、 α^+ サラセミアをもつ人々(ホモ・ヘテロ)と健常者では感染率に大きな差が認められ、健常者で有意に高かった。これは、 α^+ サラセミアがマラリアに対する抵抗性をもたらす証拠と考えられる。

3. 分子疫学と人文地理学 上記のような医学者との共同研究における演者の役割は、単に対象住民の把握にとどまるのではなく、マラリアをめぐる住民の認知と行動や集落形成の調査にもひろがっている。またこの成果をふまえて、熱帯・亜熱帯地域の農村集落や都市の高度分布や、西欧植民者が建設したヒル・ステーションの役割の再検討にもおよびつつある。

こうした研究の展開は、ヴィダル=ド=ラ=ブラーシュが「人文地理学：それと生物地理学との関係」(原著1903年)の結論部分で指摘した、熱帯・亜熱帯における民族集団と居住環境との関係、さらにはイタリアにおけるマラリアに起因する集落移転のような問題(飯塚訳『人文地理学原理』岩波書店、1970年、288-289頁)がようやく本格的に検討できる段階に達したことを示している。また疾病の罹患に関連すると考えられる遺伝的多形性と生活環境との関係の検討は、マラリア以外の疾病でも可能性が大きい。その意味で、分子疫学と人文地理学の協力の可能性はさらに開けていると考えられる。

なお、本発表の骨子は放送大学の印刷

教材, 小林茂・杉浦芳夫編(2004)『人文地理学』放送大学教育振興会の第4章「環境への適応」でわかりやすく示した。

文献(本発表に関するおもな成果を示す)

- Kawasaki, T., K. Itoh, K. Uezono, T. Ogaki, Y. Yoshimizu, S. Kobayashi, T. Osaka, M. Ogata, S. Dhungel, S. Sharma and G.P. Acharya (1993): Investigation of high salt intake in a Nepalese population with low blood pressure. *Journal of Human Hypertension*, vol.7, pp.131-140.
- 小林 茂(1996):「ネパールにおけるマラリアに対する文化的・生物学的適応」『比較社会文化(九州大学大学院比較社会文化研究科紀要)』2巻, pp.59-73.
- Sakai, Y., S. Kobayashi, H. Shibata, H. Furuumi, T. Endo, S. Fucharoen, S. Hamano, G.P. Acharya, T. Kawasaki and Y. Fukumaki (2000): Molecular analysis of α -thalassemia in Nepal: Correlation with Malaria endemicity. *Journal of Human Genetics*, 45, pp.127-132.
- 小林 茂(2000)「近世の南西諸島における天然痘の流行パターンと人痘法の施行」『歴史地理学』42巻1号, pp. 47-63.
- 小林 茂(2002)「マラリアと環境」柳澤悠編『現代南アジア4, 開発と環境』東京大学出版会, pp.203-216.

都市圏内市町村における 人口と住民構成の変化

山神 達也(京都大学文学研究科・院生)
(平成10年卒)

人口の変化はその地域の社会・経済状況を示す最も基本的な資料であり、これまで多くの研究成果を得ている。その中で、都市圏内での人口分布の変動過程を検討した既存の研究では、個別都市圏を対象としたものか、都市圏を中心都市と郊外とに二分したものが多数を占める。しかし、前者であれば厳密な都市圏間を行うことができないし、一方、後者であれば郊外市町村間の多様な人口の動向を把握することができない。そこで、本報告では、1965年以降の日本の都市圏を対象に、郊外市町村間にみられる人口変化の差異に注目しながら、多数の都市圏を同時に比較検討することを通して、都市圏内の人口分布の変動過程において人口規模別に差異がみられるのかどうかを検証した。そのさい、都市圏の設定は、山田・徳岡による標準都市雇用圏(SMEA)を用いた。

はじめに、クラッセンらによる都市発展モデルとの異同を検討すべく、中心都市と郊外の二分法を用いて都市圏内の人口分布の変動過程を検討した。その結果、中心都市と郊外の平均的な関係からみれば、人口規模が大きい都市圏ほど時間的

に早く大規模に人口の郊外化が起こったという点では、クラッセンらの都市発展モデルは妥当であるとの結論を得た。しかし、以下の点で、クラッセンらの都市発展モデルとは異なる結果が得られた。まず、都市圏の人口が減少に向かうのは小規模な都市圏に限られており、人口規模が大きい都市圏では、人口分散が弱まった後に逆都市化という人口の減少過程を経験することなく人口の再集中化がみられた。また、人口規模が小さい都市圏では、既存の研究成果と同様、必ずしも既存の都市発展モデルが想定したような都市圏内の人口分布の変動過程を経験していなかった。

次に、郊外市町村間における人口成長の差異を考慮した分析を行った。具体的には、各都市圏に占める中心都市の人口割合の変化と郊外市町村間における人口集中度の変化とを検討した。その結果、人口規模が大きい都市圏では人口密度の不均等度が弱まってきたのに対し、中小規模の都市圏では人口密度の不均等度が強化されてきたという差異が確認された。また、中規模の都市圏と小規模の都市圏との差異については、相対的に人口成長が大きかった郊外市町村の数が多いか少ないかという点で差異が見出された。すなわち、中規模都市圏の方が、相対的に人口成長が大きかった市町村の割合が高かったのである。中小都市圏の場合、郊外市町村は中心都市に隣接するものが多

いという条件を考えると、この差はセクター状の空間パターンによって示され、そのセクターの広がりという点から、人口成長がみられる空間的範囲の広狭を理解するのが妥当であろう。

また、都市圏内市町村の人口変化において、住民属性の変化がどのように影響を与えたのかを検討するために、各住民属性の人口変化に対する変化寄与率を求めた。その結果、以下の点で、都市圏の人口規模別による差異が確認された。まず、子持ち世帯と想定される15歳未満人口の動向が人口変化に重要な役割を果たしていたが、そのさい、15歳未満人口の増加する市町村が、人口規模の大きい都市圏では徐々に中心都市から離れていく傾向がみられたのに対し、中小規模の都市圏では一部の市町村に固定的にみられた。また、人口規模の大きい都市圏では、相対的に人口成長が小さい市町村でも、農林漁業就業者の減少分以上に他の職業の就業者が増えたことで人口が成長する傾向がみられたのに対し、中小都市圏では、農林漁業就業者の減少分がそのまま就業者や人口の減少に結びつく傾向が強かった。

このように、郊外市町村間にみられる人口変化の差異に注目しながら、都市圏内の人口分布の変動過程における人口規模別の差異を検討した結果、大都市圏では人口密度分布の平坦化が進展したのに対し、中小都市圏では人口密度分布の不

均等度がますます強まってきたという差異が確認された。加えて、その過程において、15歳未満人口の動向や農林漁業就業者の減少が市町村の人口変化に与える影響の現れ方に都市圏の人口規模別の違いがみられたことから、中小都市圏における人口分布の変動過程は、人口規模の大きい都市圏の縮小版であるとはいふことはできないであろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

＜新しい時代をむかえて＞

石川 義孝

4月1日をもって、京都大学が京都大学法人となりました。開学以来100年を越す歴史の中での最大の変化であり、現在はいろいろな点で全学的に混乱の渦中にあります。地理学教室も同様です。ただし、教室の金田先生は、将来計画担当の副学長として京大の法人化に対する対応を、先頭に立って検討する立場におられました。また、私は昨年度に大学評価・学位授与機構の人文系分野における教育評価の評価員をおおせつかり、旧国立大学2校と公立大学1校を担当して、書面調査と訪問調査に参加しました。これはなかなか骨の折れる作業でしたが、その過程を通じて教室の今後を考える上で

のいろいろな示唆を受けたことは幸いでした。

このような変革期には、従来のやり方を再検討し新しい試みをスタートさせて、教室の評価を上げる努力が肝要です。このような新しい時代を迎えての地理学教室としての姿勢について、今年度の教室代表を務めます私がここで述べたいと思います。

まず、学生に対する卒業後の進路指導を積極的に行う予定です。卒業後の進路としては、企業就職、公務員就職、高校教員就職、大学院進学などがあります。いずれの進路に関しても、従来教室では、学生への指導をほとんど行ってきませんでしたし、文学部でも事情はほとんど同じでした。しかし現在は、不況下で就職が一般的に大変厳しいこともあり、この点が学生の強い不満となっています。

まず、企業はきわめて多くの分野にわたっていますので、すべての分野にわたる丁寧な指導は難しいですが、少なくとも、大学で地理学を専攻した実績を生かせる分野や職種については積極的に助言を行う予定です。例えば、公務員やシンクタンク系組織は、そうした狙い目の分野の一つですので、昨年度から試行的に、公務員・シンクタンク系就職希望者向けのガイダンスを開始しました。公務員に関しては、従来は地方公務員志望者が多く、実績もあげてきました。一方、国家公務員志望者はきわめて少なかったのだ

すが、今後は国家公務員（一種試験受験者も含め）も積極的に薦める予定です。特に、卒業後どの進路に進むのであれ、地理学専攻生の重要なスキルである地理情報システム（GIS）が重要なセールスポイントとなりうることを、教室としては折りにふれて強調しています。なお、就職活動のさいに、談話会員の皆様のもとに、地理学教室の3回生あるいは4回生がお邪魔をさせていただくことがあるかもしれませんが、そのさいにはどうかご助言をよろしくお願い申し上げます。

また、高校教員に関してですが、都道府県立の高校の教員は、今は募集の数自体がたいへん少なく、募集があったとしても倍率が一般的に非常に高いため、合格はかなり難しくなっています。その一方、専任・非常勤をあわせた私立高校の教員募集は、毎年数件教室に寄せられています。しかしながら、学生・院生で教員免許を持っている人が少なく、従来はせっかく募集がきても断らざるを得ないというケースが多くありました。このことを教室ではたいへん遺憾に考えており、高校教員志望者はもちろんのこと、研究者志望者にも、是非とも教員免許を取得するよう、強く指導しています。

大学院進学については、研究者志望者は博士課程まで進む必要があります。一方、それ以外の方面に進路希望がある場合でも、例えば、高校教員やシンクタンク系の志望者など、修士課程を修了して

いたほうが有利な場合が少なくありません。こうした場合には、積極的に大学院進学を考慮するよう、指導しています。

また、談話会員の皆さんへのサービスも、談話会報を通じて高めていく努力が必要です。その一環として、とりあえず今年から、前年に会員によって刊行された出版物の情報を会報に掲載することに致しました。この会報の後の頁で、2003年刊行の会員による出版物のリストが掲載されているのを確認いただけたと思います。初めての試みですので遺漏があるかもしれませんが、万一漏れた出版物については来年以降に会報に掲載させていただくことを考えています。教室としては、会員の皆様から出版情報を提供いただいたり出版物を教室に寄贈していただくと、たいへん助かります。

さらに、教室のホームページ <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/> の一層の活用も、対応の重要な一部です。そのため、最近新たに、論文リスト、「地理学実習」報告書目次、高校生の皆さんへ、の三つの窓を上記ホームページの日本語の箇所開設しました。

まず、過去5年間における卒業論文・修士論文・博士論文の題目を掲載しました。これは、談話会員の皆様をはじめとする多くの方々に、教室関連の研究成果の一部を理解いただくためのものです。また、「地理学実習」の授業の一環として毎年秋に3泊4日の日程で地域調査に出

かけていますが、その成果を報告書にまとめ、お世話になった自治体や調査にご協力いただいた地元の方々に寄贈してきました。今回、調査地の地図を掲げ、報告書の表紙や目次を閲覧できるようにしました。さらに、高校生向けのサービスとして、オープンキャンパスの情報や推薦図書を掲げることにしました。オープンキャンパスは、当初人文地理学会の事業と連携して2001年に始めたものです。しかし、参加者が少ない年が続いたことから、今後は高校生のみならず、予備校生や京大の1, 2回生、さらには大学院受験志望者にまで参加者を拡大して、教室の紹介をしようと考えています。高校生への推薦図書の企画は、地理学専修の学部学生に、高校生でも読んで理解できそうな内容の図書の推薦文を書いてもらうというものです。これを見て、地理学や当教室に関心を持ってくれるきっかけになれば、と考えています。

他に、教室では、外国人研究者や留学生の受け入れも、従来以上に積極的におこないたく考えています。また、学生・院生に対して海外留学の薦めも続けていこうと思っています。国内はもとより海外での教室の評価の向上も、教室の今後にとってたいへん重要だからです。

<国際交流について>

昨年度6月末から12月まで、デニス・ラムリー先生（西オーストラリア大学）が本学の客員教授として地理学教室に滞在され、特殊講義を開講された他、日本での政治地理学の調査・研究にあたられました。また、本年4月から6月まで、アミラム・ゴーネン先生（エルサレム・ヘブライ大学地理学科、イスラエル）が外国人共同研究者として、日本の墓制について調査されておられます。5月12日には「Urban Residential Geography of Israeli Cities」と題して、ご講演いただきました。

<談話会員による出版物

(2003年発行のもの)>

※著者名・編者名・訳者名に、談話会員の名がある刊行物（科学研究費報告書等は除く）、

五十音順

飯田耕二郎(2003):『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版, 164頁。

Ishikawa, Y. and A. Montanari eds. (2003): *The new geography of human mobility: inequality trends?*, IGU/Home of Geography Publication Series IV, 222p.

石原潤編(2003):『農村空間の研究(上・下)』大明堂, 470頁・464頁。

石原潤編(2003)『内陸中国の変貌—改革

開放下の河南省鄭州市域一』ナカニシヤ出版, 231 頁。

岩鼻通明(2003):『出羽三山信仰の圏構造』岩田書院, 250 頁。

海野一隆(2003):『東西地図文化交渉史研究』清文堂, 750 頁。

小林茂(2003):『農耕・景観・災害——琉球列島の環境史——』第一書房, 357 頁。

千田稔(2003):『地名の巨人 吉田東伍——大日本地名辞書の誕生——』(角川叢書 26), 角川書店, 240 頁。

千田稔・宇野隆夫編(2003):『東アジアと「半島空間」——山東半島と遼東半島——』思文閣出版, 400 頁。

千田稔・渡辺史生編(2003):『吉田東伍前期論考・随筆選』(日文研叢書 32) 国際日本文化研究センター, 432 頁。

高橋誠一(2003):『琉球の都市と村落』関西大学出版部, 393 頁。

福永光司・千田稔・高橋徹編(2003):『日本の道教遺跡を歩く』朝日新聞社, 298 頁。

※※※※ 遺漏分につきましては, 次号に掲載いたします。どうぞ出版情報をお寄せ下さいますよう, お願いいたします。 ※※※

＜研究室の動静＞

教室の事務は, 引き続き真木智子さんをお願い致しております。

本年度は, 研究生 1 名, 大学院博士後期課程 7 名, 修士課程 10 名, 学部 4 回生 17 名, 3 回生 10 名となっております。

＜3 回生と新院生の自己紹介＞

本年度は 10 名の 3 回生と 2 名の新院生(修士課程)を迎えました。簡単に自己紹介していただきます。

(3 回生)

大塚俊介

僕は小さな頃から、家の周辺を散歩するのが好きで、地理学への入り口はそこにあつたようです。現在は京大サイクリング部に所属して、全国各地を走り回っています。全く有名でないような、中国地方や四国の山間部の風景が、特に印象に残っています。

岡理恵子

自分が何をしたいのかもいまいちはっきりしていない上、今年の三回生地理学専修には他に女の子がいなくて非常に心細いのですが、何とかがんばりたいと思います。よろしくお願いします。

岡本憲幸

学部3回生の岡本憲幸といいます。出身は愛知県の名古屋市です、高校の時に地理学に興味を持ち、感じが異なると知りつつも大学でも地理をやりたいと思い選びました。これから様々な分野に触れて自分の研究したい分野を選びたいと思います。

勝部泰行

はじめまして。京大に入った時から地理学科にしようと思っていたのに、特に何も勉強していません。これから何か自分のテーマを見つけて、没頭したいと思っています。よろしくお願い致します。

木野俊輔

はじめまして。木野俊輔と申します。今年から地理学教室へ配属されることになりました。どうぞよろしくお願い致します。

東海林薫

この春から地理学を専修することになったショウジといいます。神奈川県出身です。ゼミは米家先生のもとでやることになりました。歴史ある京大の地理学教室で勉強できることを幸せに思っています。精一杯がんばりたいと思います。

橋爪拓也

小学校の時から地図帳を開いてぼーとながめるのが好きで、この分野に興味を

持ちました。旅行が好きで、大学ではサイクリング部に入り、自転車で日本各地を旅しています。都市地理学に興味があります。学んだものを知識として純粋に楽しめたらと思います。

広木拓

今年、地理学教室に入りました広木拓です。京都出身ですが、関西弁は話しません。趣味は作曲と睡眠です。世界各地の社会や文化について知り、分析することによって、自分がいる世界の意外な側面を発見していきたいと思っています。

村角浩明

今年から地理学教室に配属されました村角といいます。生まれは姫路の南、小豆島の東にある家島という島です。やたら黒いですが色黒の人が多く安心しました。右も左もよく分からないので色々御迷惑をおかけしますがどうぞよろしく御願います。

林原久俊

自分の足が歩いて行けるうちが、自分の人生の限界だと思います。調査研究と五感を頼りに、地理学を学んで行きたいです。お金は無いけれど時間がある、という大学生活も残すところあと2年。満喫させていただきます。

(修士課程 1 回生)

柴田陽一

はじめまして。私は岩倉に住んでおります。したがって、下宿から教室までを自転車で行くことが私の日課であり、また楽しみとなっております。いつも行きはタイムトライアル、帰りは放浪小旅行となっております。最後に、研究分野は近現代日本地理学史です。

堀川彰子

「他の土地をもっと知りたい!」と中2から地理学を目指しました。関西大学文学部時代、朝8時からなぎなたの稽古をし昼は体育会本部役員として働き夜は机に向かいました。これからはこの全ての情熱を学問に注ぎ、がんばりたいと思いますのでよろしくお願いします。

〈昨年度の実習旅行〉

2003年度は、10月14～17日まで、兵庫県豊岡市において、2回生・3回生の計8名が調査を行い、報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

* 学部卒業生

片寄 弘也 株式会社秀英予備校

鈴木 地平 京都大学大学院文学研究科

山岡 暁 株式会社志学

山本 浩介 鐘淵化学工業株式会社

渡辺 克己 大学院地球環境学堂

* 修士課程

埴淵 知哉 大学院文学研究科博士後期課程

* 大学院博士後期課程

山神 達也 京都大学文学部・研究生

(大学院)

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

研究生 山神 達也

・わが国における人口分布の変動とその日米比較, 人文地理, 51-5, 79-96 頁 (1999)

・わが国における人口密度分布の変化——展開クラークモデルによる分析——, 人文地理, 53-6, 509-531 頁 (2001)

・日本の大都市圏における人口増加の時空間構造, 地理学評論, 76A-4, 187-210 頁 (2003)

・都市圏の人口規模からみた人口分布の変動過程, 人口学研究, 33, 73-83 頁 (2003)

D 3 有留 順子

・性差から見た大都市圏における通勤パターン——大阪大都市圏を事例として——,

人文地理 49-1, 47-63 頁(1997)《共著》
・東京大都市圏におけるテレワークと分散型オフィスの立地, 地理学評論 76-4, 44-55 頁(2003)《共著》

D 3 村田 陽平

・中年シングル男性を疎外する場所, 人文地理 52-6, 1-19 頁(2000)
・日本の公共空間における「男性」という性別の意味, 地理学評論 75-13, 813-830 頁(2002)
・男性・異性愛をめぐる空間のポリティクスー 1999 年の「西村発言」問題を事例に一, 人文地理 54-6, 557-575 頁(2003)
・岐阜県営住宅「ハイタウン北方・南ブロック」にみる空間とジェンダー, 地理学評論, 77A, (2004) (掲載予定)

D 2 沖 慶子

・牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評, 地理科学 58-2, 65-91 頁(2003)

D 2 中辻 享

・森林管理面よりみた入会林野整備事業の意義ー京都府宇治田原町・和束町を事例としてー, 人文地理 54-1, 24-39 頁(2002)

D 2 福本 拓

・大阪府における在日外国人「ニューカマー」の生活空間, 地理科学 57-4, 255-276 頁(2002)

・1920 年代から 1950 年代初頭の大阪市における在日朝鮮人集住地の変遷, 人文地理, 56, (2004) (印刷中)

D 2 Raelyn Lolohea ‘ESAU (レイリン・L・エサウ)

・International migration from Tonga, South Pacific: a behavioral approach, *Geographical Review of Japan*, 77-5, pp.130-145 (2004).

D 1 埴淵 知哉

・企業の空間組織からみた日本の都市システム, 人文地理 54-4, 389-404 頁(2002)

〈学位の取得〉

平成 15 年度に学位を取得された方のお名前と論文題目は以下のとおりです。

* 課程博士

山神 達也:「都市圏の人口動態に関する地理学的研究」

上杉 和央:「江戸時代における地理的知識の形成に関する歴史地理学的研究」

〈2004年度講義題目〉

* 講義 (系共通科目) *

教授 金田章裕 地理学

* 特殊講義 *

教授 石川義孝 人口減少時代の人口地理学

教授 田中和子 都市地理学の諸問題
 助教授 米家泰作 地理的言説・知・表
 象と近世近代日本
 人環教授 金坂清則 地理学における
 人物研究の諸問題
 総人教授 山田 誠 地域形成論
 人環助教授 小方 登 空から見た
 ユーラシアの歴史景観
 理学部教授 岡田篤正 地形学
 経研教授 藤田昌久 地域経済論
 講師 田和正孝 西南太平洋における
 海洋資源の利用—アジア
 の魚とる人々
 講師 箸本健二 情報化・産業・都市空
 間講師 山崎孝史 政治地理学—その理
 論と方法論
 講師 磯田 弦 GIS の技法
 講師 矢ヶ崎典隆 アメリカの文化景観

* 演習Ⅰ *

教授 金田章裕 地理学研究法Ⅰ
 教授 石川義孝 地理学研究法Ⅱ
 教授 田中和子 地理学研究法Ⅲ
 助教授 米家泰作 地理学研究法Ⅳ

* 演習Ⅱ *

教授 金田章裕 人文地理学の諸問題
 教授 石川義孝 "
 教授 田中和子 "
 助教授 米家泰作 "

* 講読 *

教授 石川義孝 英語地理書講読
 教授 田中和子 ドイツ地理書講読
 人文研助手 田中祐理子 フランス地理
 書講読
 人文研助手 村上 衛 中国地理書講読

* 地理学実習 *

教授 田中和子
 助教授 米家泰作
 博物館助手 上杉和央

* 大学院演習 *

教授 金田章裕 地域の諸問題
 教授 石川義孝 "
 教授 田中和子 "
 助教授 米家泰作 "

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

<地理学談話会2003年度会計報告>

(2003 年 4 月 1 日～ 2004 年 3 月 31 日)

【資金会計】

〈収入〉

年会費	152,390
前年度繰越	139,481
計	¥291,871

〈支出〉	
運営への振替	137,178
次年度への繰越	154,693
計	¥291,871

【運営会計】

〈収入〉	
資金会計からの振替	137,178
秋季懇親会会費	94,000
春季懇親会会費	137,000
計	¥368,178

〈支出〉	
秋季懇親会経費	78,330
春季懇親会費・論文発表会経費	147,000
会報・名簿等印刷費	50,000
通信・文具等費	92,848
弔電等	0
計	¥368,178

＜訃報＞

前回の会報以降、次の方がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます（確認分、括弧内は卒業年、敬称略）。

林 正己（昭和 20 年卒）

＜お知らせ＞

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。

（数字は卒業年、敬称略）

青木 秀和	平成 03
浅井 得一	昭和 11
荒賀 紀子	平成元
生田 博文	昭和 51
池内 麟太郎	昭和 48
石角 強	昭和 45
石原 大嗣	平成 09
石村 裕輔	平成 04
今井 平八	昭和 19
岩部 敏夫	平成 03
江崎 健治	平成 04
遠藤 元	平成 08
遠藤 正雄	昭和 53
大野 宏	平成 04
大山 晃司	平成 07
岡本 靖一	昭和 42
岡本 美津子	昭和 62
興津 俊之	平成 03
小口 稔	平成 03
楓 雅之	昭和 20
柿沢 洋雄	昭和 60
勝村 真知子	昭和 48
加藤 典嗣	昭和 63
川合 大地	平成 10
川添 和明	平成 07
貴志 謙介	昭和 56
木地 節郎	昭和 24
児玉 高太朗	平成 02
坂部 誠治	平成 03
渋谷 良治	平成 04
新谷 泰久	平成 02

田島 渡	昭和 23
塚本 誠	平成 02
都子 厘	昭和 15
中川 訓範	平成 09
中山 耕至	平成 05
那須 久代	昭和 63
南部 一寿	平成 11
西尾 正隆	昭和 45
西沢 仁晴	昭和 49
西山 隆彦	平成 07
能勢 正寛	昭和 37
野田 茂生	昭和 36
長谷川 正雄	昭和 52
林 克子	平成元
林 宏	昭和 16
原 潤	平成 09
福田 新一	昭和 46
松本 弘史	昭和 58
三木 寛史	昭和 61
御手洗 央治	平成 05
山口 一郎	昭和 55
山下 和久	昭和 57
山下 良	平成元
山田 憲子	昭和 45
吉野 修司	平成 07
六嶋 美也子	平成 05

＜オープンキャンパス：2003年度の報告と2004年度のお知らせ＞

2003 年 8 月 11 日・12 日の両日、京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会もこれの一環として行われました。各専修ごとに見学者グループ分かれて、研究室訪問や文学部の施設見学をした他、全体説明会や教官への質疑コーナーも開かれました。

地理学教室では、独自のオープンキャンパスを開催しました。高等学校の教員の方々や他大学に在学中で地理学の大学院を志望されている学生の方が参加されました。地理学実習室や博物館地図作業室を見学したり、卒業研究や進路の様子について説明を行いました。

今年度の地理学教室のオープンキャンパスは、8 月 4 日（水）に開催予定です。学部だけでなく大学院の受験志望者や、中学高校の教員の方々、また、一般の市民の方にも来て頂けるような企画を検討しております。教室主宰のオープンキャンパスについての詳細な日程や参加申込の案内は、地理学教室のホームページ、
<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>
 に、近日中に掲載しますので、そちらをご覧ください。

なお、京都大学主催の全学オープンキャンパスについては、

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>
をご覧ください。

☆本年度の談話会費（1000 円）を未納の方は、同封の振込用紙にてお払いください
ますよう、よろしくお願い致します。

＜2004年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞

本年は下記のように実施する予定です。
時計台は、昨年、改装を終えて記念館として新たにオープンいたしました。展示室等も整備されておりますので、見学が
てら、どうぞご参加くださいますよう、
お願いいたします。また、懇親会の会場も、大学構内カフェ「カンフォーラ」と
いたしました。

【編集後記】

ご寄稿、ご講演いただきました皆様、
ありがとうございました。

談話会係：埴淵，真木

記

日 時：11月6日（土）

午後2時—5時

場 所：時計台記念館

国際交流ホール I

講演予定者：

石田 寛（福山大学教授）

門井 直哉（福井大学教育地域科学部
助教授）

村田陽平（京都大学大学院博士課程・
院生）

懇親会：同日午後6時より

（「カンフォーラ」京都大学正門横）

京都大学文学部地理学談話会 会報 第 15 号

発行日 2004 年 5 月 15 日

発行者 地理学談話会

〒 606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

TEL: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>